

熟視の末の写実に深み 早川俊二展

画家、早川俊二がほぼ二年半ぶりの個展を、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで開いて

いる(三月十三日まで)。絵を描き切るとは、どういふことなのか。画家は絵筆を一体どこで

と従来風の作品が好一對の対照を見せているのだ。例えば、コーヒー挽

あるように思う。写実に徹した果ての新境地であるのか。

後、油彩画に取りかかったが、どうしてもフェルメールやレンブラントなど西洋の巨匠たちのような画面の質感が出せないことから、独自の油絵の具作りの研究を始めた。四半世紀近くを経た今、初めてその画面を見た人から「これは陶板に描いているのですか？」と問われるほど堅牢で重厚な絵肌の創出に成功した。



風景へ(コーヒー挽き、砂糖壺)

1100四年



静物(コーヒー挽き、カップ、貝)

1100三年

度が画面に

間違いない。(編集委員 竹田博志)

熟視の末の写実に深み 「早川俊二展」

画家、早川俊二がほぼ二年半ぶりの個展を、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで開いている（三月十三日まで）。絵を描き切るとはどういうことなのか。画家は絵筆を一体どこのタイミングでおくのか——二十六点の新作を見ながらそんなことを思った。

今回は、一群の最近作と従来風の作品が好一对の対照を見せているのだ。例えば、コーヒー挽きを描いた二点を比べると、近作の方がものの形が一見するとおぼろげに見える。追求の絵筆を途中でおいたようにさえ感じる。

ところがその分、ひたすらリアルに描き切ったこれまでのものより、見る者の視線を誘い、吸い込むような深度が画面にあるように思う。写実に徹した果ての新境地であろうか。

早川の描く対象は身近なものばかりだ。機械油差しや貝、リンゴや梨。あるいは女性像やすすめなど、長い間の熟視の末、なじんでしっかりとまぶたに刻まれたものを、丹念な描写力で再現する。独特の下地を施した上に繊細なタッチで塗り重ねられた作品は、透明感のある独特のマチエール（絵肌）とともに強い説得力を持っている。

早川は三十年前に渡仏、パリの国立美術学校でデッサンからやり直し、学ぶこと四年。その後、油彩画に取りかかったが、どうしてもフェルメールやレンブラントなど西洋の巨匠たちのような画面の質感が出せないことから、独自の油絵の具作りの研究を始めた。四半世紀近くを経た今、初めてその画面を見た人から「これは陶板に描いているのですか？」と問われるほど堅牢で重厚な絵肌の創出に成功した。

「これからです。ようやく山の登り口にたどり着いた」と控えめに語る早川だが、厄介で執拗な自己批評家を、自分の中に同居させていることは間違いない。

（編集委員 竹田博志）

日本経済新聞 2004年（平成16年）2月25日（水曜日）掲載